

Historian's View

NO. 26

□ 齊藤惣一さんとその時代

- 淵田多穂理さんと齊藤惣一さん
- ヘッドハンティングでYMCAへ
- 太平洋会議で培った人脈
- 引揚援護院の長官として
- 日本のジョン・R・モット

2011年2月1日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

淵田多穂理さんと齊藤惣一さん

日本 YMCA 同盟の御殿場・東山荘の敷地は、東に開け、緑の木立ちの斜面には、宿泊設備が点在しています。朝日が一番早く届くのは、1号館。元同盟総主事・齊藤惣一さんを記念するための建物です。ここから小径を辿り、西側にやや下がったところに、富士山が山裾まで望める黙想館があります。内部の壁に、YMCA の歌の作詞者である淵田多穂理さんの『若人の熱き祈り』の小さな書が掛かっています。

ワイズソング『いざ立て』の訳詞者でもある淵田多穂理さんについては、25号で紹介しましたが、齊藤惣一さんとも縁があるのです。

齊藤さんが第五高等学校（熊本）の教授だったとき、教会の日曜学校のバイブルクラスで淵田さんを教えているのです。学業優秀だった淵田さんは、齊藤先生のいる五高に進み、東京帝国大学に入ることを夢見ていました。しかし、父親の反対によって、違う道に進むことになったのです。満鉄に勤務した淵田さんは、北京 YMCA の理事を務め、ここで同盟総主事になっていた齊藤さんと再会するのです。戦後、YMCA 主事となり、熊本 YMCA から同盟に転じますが、その時の同盟総主事は齊藤さんなのです。（『とこしえの希望に燃えて—YMCA と淵田多穂理—』星野達雄 1997年）

ヘッドハンティングでYMCA主事に

東京帝国大学を卒業後、五高で英文学の教授だった齊藤さんに目を付けたのは、北米 YMCA か

ら派遣されていたゲーレン・M・フィシャー（Galen M. Fisher）主事でした。当時の日本の YMCA の主事は、ヘッドハンティングによって迎えられることがあったのです。彼は、齊藤さんの五高の YMCA 花稜会（五高の学生 YMCA）時代にも、YMCA に誘っていました。フィッシャー主事は、最初から、齊藤さんに同盟主事としての働きを期待したようです。

齊藤さんは、1916年、日本 YMCA 同盟に入職しました。31歳。前年には、開校する西南学院から院長就任を打診されていました。

1921年に同盟総主事となり、1924年から9年間、関東大震災後の東京 YMCA 総主事を務めた後、再び1933年に同盟に復帰して、1956年まで総主事を務めました。

齊藤さんについては、YMCA 主事であり、ワイズメンであった海老沢義道さんが執筆した『齊藤惣一と YMCA』（同盟出版部 1965年）が、ぜひお薦めしたい好著です。

太平洋会議で培った人脈

齊藤さんが、いかなる人物であったかを語るものとして、彼が参加した太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations：太平洋会議といわれる）があげられます。この会議は、1925年にホノルルで設立されました。国際的な非政府組織の学術研究会であって、太平洋沿岸諸国や関わりのある国の識者が集って、民間レベルでの相互理解、文化交流を目的としたものでした。中国の不平等条約、日米不戦条約、人口、食糧、資源

の分布などがテーマになったこともあります。

発足以来の日本人メンバーが、いかなる者かを知る時、齊藤惣一さんの一面を見ることができません。名を連ねたのは次のような人物でした。洪沢栄一、新渡戸稲造、高柳賢三（英米法学者）、那須皓（農政学者、後のインド大使）、前田多門（後の文相）、浦松佐美太郎（登山家）、蟬山政道（東大教授、政治学者）松岡洋右（満鉄副総裁、後の国際連盟首席全権）、鶴見祐輔（政治家）、牛場友彦（近衛文麿の側近）、松本重治（国際ジャーナリスト）、高木八尺（政治学者）

太平洋会議は、ハワイのYMCA から Pacific YMCA Conference として、1920 年ごろから始まりました。当初は、太平洋沿岸諸国の YMCA 同盟が、プログラム編成、参加者の人選、費用集めなどを行っていたもので、2 回までは YMCA が中心でしたが、3 回目から政治色が強くなりました。

会議は、隔年に開催され、齊藤さんは、第 1 回の 1925 年（ホノルル）、1927 年（ホノルル）、1929 年（京都）、1931 年（上海）に参加しています。日本側参加者は、満州における日本軍の軍事行動を批判され、しだいに孤立していきました。それでも、1933 年の国際連盟脱退後は、日本が対外的に発言する唯一の機会となっていました。1935 年が最後の参加となり、1943 年には敵性調査機関とされ、日本側の会議は、解散させられました。

戦後、韓国大統領となった李承晩もホノルルに亡命中で参加していたという話もあります。

齊藤さんは、戦前、毎年のように YMCA やキリスト教関係団体の大会や会議出席のために、北米、ヨーロッパ、アジア諸国を訪問しています。1 年に 3 回渡航した年もあります。満州事変以後は、日本の立場の理解を得るために、また日米関係改善のために、欧米の各地に講演旅行を行いました。

2 年もすれば戦争は終わる

満州事変から日中戦争、そして太平洋戦争と戦火が拡大しました。YMCA 活動は軍国主義の中で縮小していきました。国粋主義から社会主義まで、公認された政党はすべて、大政翼賛会一本に吸収されてしまいました。そのような状況下で、YMCA の主事数人が話し合い、大政翼賛会に齊藤さんを送りこんで、活躍してもらい、YMCA も国家体勢に協力しようという意見が出ました。相談された、*山本忠興・同盟委員長は、次のように答えたそうです。

「絶対にそんなことをやっちゃいかん。この戦争は 5 年か 10 年じゃなく 2 年もすれば終わる。その時、アメリカと協力してやれる人物は齊藤だから、そのためには、今出してはいかん」。『曇り日の虹ー上海YMCA 40 年史』池田鮮 1995 年 教文館)

*山本忠興さんは、早稲田大学理工学部教授。戦前に早大・安部球場でテレビジョンの実験をしたことで知られる。日本学生陸上連盟の会長、アムステルダム、ロサンゼルス五輪の役員も務めた。

引揚援護局の長官として

太平洋戦争が敗戦というかたちで、終結した時、海外には、民間人 330 万人、軍人・軍属 330 万人、計 660 万人の日本人が取り残されていました。加えて朝鮮人、中国人など在外外国人の希望を確認して帰国させるといった難題がありました。

当初、日本政府は、海外の軍人・軍属は、帰還させ、民間人は、できるかぎり現地に定着させる方針でした。在外公館に民間人の安全を確保するよう指令を出しました。しかし敗戦の 2 カ月後、日本政府の外交権は連合軍総司令部（GHQ）に奪われ、海外在住日本人の安全が脅かされる事態になりました。民間人の引揚も実施することになり、GHQ が一元的な引揚事業を行うようにと指導し、厚生省が中央責任官庁となりました。『引揚と援護 30 年の歩み』厚生省 1978 年)

しかし、600 万人もの人を短期間に引き揚げるということは、かつて人類が経験したことのない

「民族大移動」でした。1945年の日本の人口が7,241万人でしたから、その膨大さが分かります。

すべての都道府県、すべての省庁が関わる問題でした。まだ、どの国とも国交も回復しておらず、外交ルートもない状況でした。山積する難題のひとつは、輸送機関、特に壊滅的な打撃を受けた船舶は絶対的に不足していました。

昨年、横浜国際大会の会場となったパシフィコ横浜から岸壁を10分ほど歩いたところに、帆船「日本丸」が保存係留されています。この船は、国の航海訓練所の練習帆船として1930年に進水しました。案内パンフレットによれば、定員196人のこの帆船までが、1945年から引揚輸送に従事して、中国、南方諸島へ29航海し、25,423人を輸送したと記されています。いかに船舶事情が逼迫していたかが想像出来ます。

厚生省の外局として、引揚援護院（1948年になって陸海軍の復員局を統合して引揚援護局となる）の長官として重責を担える人材は政界、官界にいませんでした、白羽の矢が齊藤惣一さんに立ったのです。

後に首相となる芦田均厚生大臣が、齊藤さんを訪ねて懇請したそうです。

「600万人を超える在外抑留日本人の労苦に対して、敗戦後の政府として与えるものは何もない。せめて暖かい愛の手だけでも差し伸べたい。それには、あなた以外の適任者は見当たらない。どうか受けていただきたい。YMCAが問題なら、YMCAごと厚生省でお世話したい」。

齊藤さんには、1945年10月ごろから要請がきていたようです。教授の職を捨て、青少年のために働くことをライフワークと決意して転じたYMCA、その再建に取り組み、そのことを通して新しい日本を建設する夢と重責がありました。しかし、海外に取り残された同胞を放置することはできない、整然と引き揚げを行い日本の民族の誇りを世界に保ちたいという、国際人として、愛国者としての思いもあったでしょう。YMCAの委員、スタッフと協議した後、幣原喜重郎首相、芦

田均厚相の度重なる説得を受諾しました。

1946年3月7日の朝刊に、「引揚援護院 長官に齊藤惣一氏」という見出しで、新しい引揚事業の組織改訂と齊藤惣一 YMCA 総主事が初代長官に任じられる見込みを伝えています。

引揚事業は予定よりも難航しました。これは米ソ冷戦が始まり、米国とソ連とで交わした協定が履行されず、占領軍司令部の指令が徹底されなくなった事情もありました。

齊藤さんは1950年9月まで、その任にありました。彼個人の見識、人脈、指導力なくしてこの事業の遂行は一層困難だったでしょう。

この間、齊藤さんはYMCAを退職した形でしたが、重要な会議には出席して助言し、YMCAのための海外出張などもこなしました。入職したばかりの齊藤實・元東京YMCA副総主事は、黒塗りの車で移動する惣一さんをよく見たそうです。

日本のジョン・R・モット

齊藤さんが、同盟と東京YMCAの総主事を務めた1921年から1956年の35年間は、日本にも、YMCAにとっても、激動の時代でありました。当然のことながら、本業においても大きな功績を残しました。

このことについて、五十嵐丈夫同盟委員長（1951-1955、1959-1961）は、「日本のYMCAを初めてナショナルな活動としてスタートさせた」としています。海老澤義道さんは、「日本における*J・R・モット」として、「日米の教会、YMCAのスケールの差、違いを考慮に入れば、これは決して言い過ぎではない」と書いています。

齊藤さんは、ワイズメンとしては、当時、国際憲法にあった名誉会員で、表に出ることはありませんでした。しかし、1959年に日本区が第2回アジア地域大会のホストを行った際、歓迎のメッセージを述べられた秩父宮妃殿下のそばに寄り添う写真が残っています。同盟総主事を退任した3年後です。法人格を持たない日本区の海外代表

の入国受け入れ、皇族の臨席などに、裏面から尽力があったであろうことが想像できます。

*ジョン・R・モット (John R. Mott 1865-1955) は、米国が生んだYMCAを含むキリスト教諸活動の世界的な一致協力のために先駆的な役割を果たし、尽力した世界的な指導者。「パウロ以来の使徒」といわれた。1946年にノーベル平和賞を受賞。来日8回、勲一等瑞宝章受章。

齊藤さんは、幅広い分野で活躍しました。引揚援護院長官に就任した年に、国際基督教大学の建設委員長に就いています。

1960年、賀川豊彦をノーベル平和賞の候補にする打合せ会に出席後、体調を崩し、逝去しました。75歳でした。

あとがき

■旧厚生省図書室に、『昭和23年厚生省職員録』がありました(現在は個人情報保護のために閲覧できません)。ざら紙のA6サイズの粗末なもので、引揚援護院の頁に長官・齊藤惣一と次官の名のみ記載されていました。他の局や課にはない、「夜間直通電話番号：(銀座)4361」は、仕事の厳しさと緊迫感を、今も語っているようです。

■海老澤義道さんは、齊藤さんを「日本におけるJ・R・モット」と書いていますが、モットはノーベル平和賞受賞者です。

ちなみに、ノーベル平和賞の第1回受賞者は、1901年のアンリー・デュナン (Jean Henry Dunant:1828-1910) です。彼は、ジュネーブ条約と赤十字の創始者として知られていますが、YMCA世界同盟の結成の中心人物でもあります。YMCAは、ジョージ・ウィリアムズによって、1844年に創立しました。これがヨーロッパ諸国に広がり、米国でも発展した時点で、各国に呼びかけ、1855年に世界YMCA同盟結成となる国際組織にしたのはデュナンでした。

■ここまで、文献を頼りに書いてきました。齊藤さんについての思い出を、ワイズメンから、聞きたいと思いました。現役時代の齊藤さんを知る方は、親族や元主事を除くと十指に満たないでしょ

う。その中のお一人、布能寿英さん(甲府)に接インタビューしました。

「20代の終わりごろ、甲府に見えた齊藤さんに市内をご案内して写真をお送りしたら、すぐ礼状がきました。見事な毛筆もさることながら、礼状とはかく書くものかと、いまだに文面を憶えています。「同盟総主事を、永井三郎さんに引き継ぐとき、永井さんを紹介の中で、『空襲でわが家が全焼したとき、まっさきに駆けつけてくれたのが、永井さんで、聖書と縫い針、糸を持ってきてくれた』と、加えられことにも感銘を受けました」。

■国を挙げての大事業を成し遂げた、このような先輩がYMCAにいたことは、私たちにとって誇らしく思います。同時に、YMCAを通じて、齊藤さんが、さまざまな国際会議に参加して、人脈と国際感覚を培っていたことも事実でありましょう。

時代が人を求め、人を備え、また、その人の正しい理解者がいたことを強く感じます。

■YMCAも同様に、それぞれの時代に求められてきた歴史があります。今も求められているのでありましょう。それが何であるのか、静かに耳を傾けたいと思います。

昨年、横浜国際大会の前に香港で行われた世界YMCA同盟総会に参加したワイズメン(YMCAの会員でもあるのですが)は、一様に強烈な衝撃を受けたと報告しています。

国連加盟国192中125国が加盟し、世界最大のNGOであるYMCAに、何が期待されているのか。何が大きく変わろうとしているのか。日本各地のYMCAがそれぞれの地域に何を期待されているのか。国際と日本各地でのYMCAへの期待は異なったものなのか。共通するものがあるのか、それを貫くものは何なのか。ワイズメンとして、把握していただきたいことです。ノートと鉛筆をもって、このために集まり、YMCA関係者の話をゆっくり聞いてみたいと思います。

(歴史上の人物につきましては、敬称を省略させていただきます。)